

ひかりのおもさ

クリスマススイブ。

ある街の片隅の、警察の官舎に暮らす、村上学、村上風子夫婦。
舞台上には、ソファールとローテーブル、いくつかの調度品に囲まれていて、片隅にはクリスマスツリーが点灯している。

第一場

学、座ったままコーヒーを一口飲む。

急に何か不安になったのか、妻を探し、名前を呼ぶ。

学　　風子、おい、風子？いないのか？風子、おい、風子！

その声は、やがて大きくなり、叫び声に近くなる。

学　　風子！風子！風子！

風子、電話を持って登場。

学　　何してたの。

風子　何って電話ですけど。

学　　誰と。

風子　百合子。

学　　そう。

風子　8時半頃、着くそうよ、駅。いいかしら、お迎え。

学　　8時半な。

風子　また詳しくわかったら、電話、くるみたい。

学　　だからこれ、出したの。ツリー。

風子　いけない？

学　　久しぶりに見たような気がしたから。

風子　クリスマスチャンでもないのに、毎年飾ることもないだろうって。どんな顔して眺めればいいんだって。だから、押し入れの奥にしまっておきました。

学　　そんなこと、言ったかな。

風子 言ったわよ。
学 覚えてない。
風子 でしょうね。

学、ツリーをしばらく眺める。

学 それで、百合子。何か用でもあるのか。急に帰ってくるなんて。
風子 まあ。

学 何。

風子 紹介したい人がいるんだって。

学 え？

風子 だから、紹介したい人。

学 誰に。

風子 誰にだって、私たちに決まってるじゃない。

学 何で。

風子 何でって・・・だからね、百合子が会ってほしい人がいるんですって。

学 それはあれか、つまりその、男か。

風子 そんな言い方しなくてもいいじゃない。

学 百合子が男を連れてくるんだな。

風子 ええ。

学 聞いてないぞ。

風子 予想以上の反応ね。

学 それで、クリスマスツリーで歓迎ってわけか。

風子 だって、賑やかじゃない。今日はクリスマススイブなんだし。

学 日本人はおかしいんだよ。一週間後には、こぞって初詣で神社に行く

のに、今日はみんなでメリークリスマスって、いったい何事だよ。おまけに葬式じゃあ、般若心経まで唱えて。

風子 だって、学さんが買ったんですよ、そのツリー。百合子が小さいとき。

学 そりゃ、百合子が小さかったから・・・ただのおもちやだろ。

風子 でしょう。クリスマスだから飾るとか、飾らないとか、そんなこと考えてないわよ。ただなんとなく、クリスマスだから、飾っているの。どこだってそう。

学 とにかく・・・目障りなんだよ。チカチカして。

風子 いいじゃない。案外、部屋に合ってる。

学 全然。

風子 じゃ、しまえますか？

学 いいよ、もう。

風子 そうですか。

学 その男っていうのは、あれか。つまり、百合子の、そういう、

風子 そうよ。

学 そうよう!？。

風子 じゃあ、誰?お友達?職場の同僚?生き別れた腹違いの弟がいたとか?

学 真面目に答えろ。どこまで聞いてるんだ。

風子 取り調べですか。

学 はぐらかさないで、言え。

風子 あのねー、そんなんじや、誰も本当のこと言わないわよ。話には順序つていうものがあるでしょう。水辺にロバを連れていくことはできても、ロバに水を飲ませることはできないの。まず、ロバが水を飲もうとしなくっちゃロバは水を飲まないでしょう。

学 ロバの話はいいから。どこまで聞いてるの?

風子 ・・・相談があったのが、2か月くらい前かしらね。

学 なぜ、すぐに言わないの。

風子 だって・・・忙しかったでしょ、ずっと。事件にかかりつきりです。

学 だけど、そんな大切なこと、なぜ黙ってた。

風子 とても言い出せる雰囲気じゃなかったわよ。

学 ・・・でも、よかったわね。犯人、無事につかまって。

学 ・・・被疑者な。裁判が終わるまでは、ただの疑いのある者だ。

風子 そう、被疑者。

学 威信がかかっていたからね、県警の。白昼堂々起こった事件なのに、なかなか逮捕まで持っていけなかったからね。さすがに焦ったよ。隣の団地の小学生の証言がなかったら、今頃まだ、その辺をうろろろしていたかもしれない。

学 まだ殺された子供が小さかったから。すべてのブラジル人が犯罪者であるかのような印象を与える報道も多かったし、ネットでは、被疑者に対する罵詈雑言が飛び交った。ブラジル人は国へ帰れ、だなんてあからさまに言い出す奴らが増えた。うまく行きかけていた、共存への道が閉ざされた地域コミュニティーも多かったと聞いている。今じゃあ、ブラジル人には近づくな、一緒に遊ぶなんてもつてのほかだと、自分の子どもに言う保護者も増えた。教師も、子どもたちにうまく説明する言葉を持たない。日本に在留資格を持つブラジル人は、現在100万人もいるのに、いったいこれから、何をどうしていけばいいのか。

風子 難しい問題ね。

学 あんな殺し方をするなんて・・・日本人にはできないね。考えられない。文化が違うんだ、奴らとは。文化が。

風子、棚の上のオルゴールを見つけ、ねじを巻く。

部屋に流れる「涙そうそう」の音色。

風子 これね、高校の修学旅行で百合子が買ってきたんですよ。お土産に。

学 どこへ行ったんだ？修学旅行は。

風子 沖縄。

学 飛行機で？

風子 そりゃ、そうでしょ。

学 僕の頃は、この辺の高校生は、どこも京都、奈良だったけど。君は？どこへ行ったの。高校で。修学旅行。

風子 広島。

学 そう。

風子 北陸だとね、どこへ行くのも、あまり変わらないのよ。どこへ行くにも遠いの。

学 そう。

風子 行ったね、広島。夏だった。あんまり暑いものだから、喫茶店に入っ
て、二人でかき氷食べたわね。

学 覚えてない？

風子 覚えてない。

学 そう。

風子 逆に君はよく覚えているね、そんなことを。いちいち。

学 だって・・・とってもおいしかったんですもの。かき氷。いちご。

学、座って、コーヒーを飲む。

風子 あのね、

学 うん。

風子 在日の韓国人なんだって、相手の人。

学 ふーん。

風子・・・2か月前ね、百合子が電話してきて、お母さん、好きな人ができたの。私のいいところをたくさん褒めてくれて、足りない部分をやさしく教えてくれて、良い人だって。同じ学校の同僚の先生だって。

国語の。百合子は小さい頃から何でもできて、だからこそ、誰かに頼ることが下手で、たぶんいっぱい苦労してきたと思うの。でもね、電話の声を聞くと、本当に百合子にとって必要な人なんだなって思ったの。それで、冬休みに入ったら、一緒に帰省したいって・・・結婚を考えているって・・・まずはうちに寄って、その後、一緒に向こうのご実家に行くつもりだって。大阪の人だって・・・それでお母さん、彼、在日の韓国人なんだけど、許してくれる？って。

学

・・・

風子

許してって・・・どういうこと？って聞いたの。そしたら、彼がそう言っているって。結婚するってことは、そういうことだから、まず最初に、君の両親に話をしてほしいって、そう言っているって・・・まあ、当然だろ。向こうにしてみたら。

学

風子

でもちよつとショックだったわ。百合子、そんな風に私のこと、見たのかなーって。

学

それで。

風子

許すに決まっているじゃないって、私言ったわよ。あなた、何言っているのって。そんなこと、何の問題もないわよ。相手の国籍がどうか、そんなこと、お母さん、なんの問題もないと思うって言ったの。百合子、泣いてたわよ。電話の向こうで。

学

そうか。

風子

お父さんにも、あらかじめ言っておいてって言われていたんだけど・・・。だけどね、電話を切って思ったのよ。本人同士はいいだろうけど、向こうの親御さん、どうなのかなって。日本人と結婚することになって。

学

4世になるのか。

風子

そこまではまだ訊いてない。何度も電話して、色々聞こうとも思ったんだけど、なんか、うまく自分の考えが整理できなくて。そのうちに、今日になっちゃったの・・・。

学

なぜ、黙ってた。

風子

だから、事件があったから。

学

違うだろ。

風子

在日だからだろ。

学

え？

風子

だから言わなかったんだろ。言えなかったんじゃないかって、言わなかったんだろ。

風子

そんなに責めないでください。

学 責めてなんてないよ。

風子 そう？何だか私、すごく責められた気持ちだけど。

学 違う。そんなつもりはない。

風子 だって、学さん、百合子が修学旅行どこに行ったか、知らなかったじやない。広島でかき氷食べたこと、覚えていなかったじやない。じゃあ、百合子、中学のとき、何部だったか、言えますか？

学 じゃあって、何だよ。じゃあって。

風子 もう、なんで私がこんな気持ちにならなくちゃいけないのよ。

学 僕だってそうだよ。何で、こんな風になるんだよ。まったく・・・よりによってなあ・・・男なんて、いくらでもいるのに。

風子 ……

学 ちよつと出てくる。

風子 え？どこに。

学 パチンコ。

風子 パチンコなんて、やらないでしょう。

学 じゃあ、買い物。

風子 じゃあ、つて何よ、じゃあって。財布も持たないで。

学 とにかく、ちよつと。

風子 百合子、もうすぐ着くのよ。迎えにいかなくちゃ。

学 タクシーで来ればいい。どうせ、僕には、百合子の結婚に口出す権利なんてないんだろう。

風子 そういうことじゃないの。

学 だって、君は責めたじやないか、僕を。そうやって。

風子 10数えよう。私と一緒に。1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9,

10!

学 ……

風子 保育園でね、子どもと一緒に数えるの。10数え終わると、冷静になるから、もう子どもがぐずってどうしようもないときには、一緒になつて数えるの。

学 僕は保育園の子どもか。

学、ソファーに座る。

学 原発に賛成か反対か、自民党を支持するかしないか、福島県産の野菜は食えるか食えないか、夫婦でも、意見の対立が起こるような話題が、最近、この国では増えてきてはいないだろうか。それを聞いてしまっ

たら、もう、一緒にいられないようなことが。結末は分断しかない、お互いに歩み寄ることが、難しいことが。

風子 どういうこと？

学 触れない方がいいってこともある。たとえば、それが夫婦だとしても。

風子 私もね、ずいぶん考えたの。どこかの誰かのことじゃなくて、私自身が当事者になってみてね、百合子が、在日の人と一緒になるかもしれないんだって思っって、

学 君の中の熱のようなものだ。

風子 熱？

学 そう。

風子 熱？どういうこと？熱？

電話の鳴る音。

風子 (出て) もしもし、え？そう・・・わかった。ううん、こっちは大丈夫だから。気を付けてね。あ、食事はどうするの？わかった。じゃあ、

また電話してちょうだい。

電話を切る。

風子 トラブルがあって、新幹線、停まってるって。

学 え？

風子 何時になるかわからないって。

学 そうか。

風子 うん。

風子、電話機を持ったまま、立っている。

学 どうなんだ、うまく、やってるのか。仕事は。

風子 みんな、親切でやさしいから。大丈夫。

学 迷惑、掛けないようにな。おばさんなんだから。

風子 わかっている。

学 仕事、させてもらえるだけ、ありがたいんだから。

風子 わかっています。

風子、いなくなる。

学、立ち上がって、オルゴールのねじを巻く。

第二場

学、何やら考えているが、とたんに不安になって、風子の名前を呼ぶ。

学 風子、おい、風子？いないのか？風子、おい、風子！

その声は、やがて大きくなり、叫び声に近くなる。

学 風子！風子！風子！

風子、登場。

学 どのあたりだった？今。

風子 小田原を過ぎたあたりって言った。

学 過ぎたあたりって、駅じゃないのか。停まってるの。

風子 駅と駅の間にとまっているんですって。

学 そりゃ大変だ。

風子 こういう時、テレビがあればいいのにね。

学 テレビなんて信用できない。

学、スマートフォンを見る。

風子 ネットだって、信用できないと思うけど。

学 今は特別だ。

風子も、スマートフォンを見る。

風子 嫌だ・・・全然、見えない。

学 僕も、ぎりぎりだ。

風子 嫌ね、夫婦で、年寄りみたいで。

学 実際そうなんだから、仕方ない。

風子 もういくつになるんだっけ。私たち。

学 自分の歳も忘れたのか。

風子 数えるのが怖いよ。

学 どっちにしたって、年は取るよ。

風子 同じ歳だと、こういうときいいわね。夫婦どちらかが分かっていたら

学 いいんだから。

学 どちらも忘れたらどうするんだ。

風子 それはそれでいいじゃない。

学 そうか？

風子 そうよ。

学、スマートフォンで、ニュースの記事を閲覧し、

学 お、あつたぞ。電気系統の故障により、小田原―熱海間を走行中の車

両が緊急停止。その影響で、東海道新幹線は、全区間で運転を取りやめ……。

風子 ええー。

学 なお、車両への電源の供給ができなくなっていることから、車内の空調や照明も停止している模様……って、百合子、これに乗ってるってこと？

風子 そうじゃない？

学 ずいぶん呑気だな。だって空調が停まってるなら、寒いだろうし、真っ暗なのかな。いや、非常電源装置くらい積んでるだろうし、真っ暗ってことはないか。

風子 学さんの気持ちしが新幹線に乗り移ったのね。きっと。

学 そんなことはいいから、ちよつと電話してみて。百合子に。もう少し状況を聞いてみて。

風子 どんな？

学 どんなって、状況だよ。今の。

風子 わかりました。

風子、電話をかける。

学、スマホをいじる。

風子 でない。

直接、留守電に。「ただいま電波の届かないところにあるか、電源がはいっていないためかかりません」だそうです。

学 充電が切れたかな。

風子 どうだろう。コンセント、あるもんね、新幹線。

学 (スマホをいじる)

風子 何かわかりそう？

学 同じ車両に乗ってる人が、つぶやいてないかな、と思っただけ。

風子、スマホを覗く。

学　　なんだよ。

風子　べつに？

学　　覗くなよ。

風子　あら、隠し事？

学　　そうじゃないけど、気になるんだよ。覗かれると。

風子　ふうん。

学　　（スマホを引き続き見る）

風子　何か、わかりましたか？

学　　何も出てこないな・・・誰かしら、つぶやきそうなものだけど。

風子　電波が入らないところに停車中とか？

風子、このあたりで、ろうそくに火をつけて、机に置く。

学　　君ね、もう携帯が使えない場所なんて、人口的には、ほとんど0だよ。

ましてや、新幹線が走っているエリアなのに。

風子　そうなの？

学　　いったい、いつの時代の話をしているの？

風子　だけど、あるんじゃないの？こう、電波と電波の境目みたいな場所が。

たまたまそこに停まってるとか。

学　　・・・何してるの、ところで。

風子　ああ、ろうそく。

学　　それはわかるけど、もちろん。

風子　ちよっと、ね。

学　　なんの真似・・・

風子　クリスマスだし。

学　　一所懸命、状況把握しようと思ってるのに、君はクリスマス？

風子　昔読んだ小説にね、あったの。その街では、向こう一週間、夜の一時間だけ工事のために停電することになるの。一週間だけね。そこである夫婦は、その停電の時間を使って、お互いの秘密を打ち明けることにするの。ろうそくの火をはさんで。

学　　ふうん。

風子　どう？せっかくですもの。お互いの秘密を、打ち明けてみない。相手にこれまで黙っていたこと。

学　　え？今？

風子 新幹線も遅れていることだし。

学 ちよつと、そんな気分にならないよ。百合子、心配じゃないのか。

風子 いいじゃない。こういうときは、焦らないで、気長に待ちましようよ。どう？

学 気が乗らないな。

風子 いいでしょ？じゃ、まず私から。

学 ちよつと待って・・・僕、やるって言ってないけど。

風子 嫌？

学 嫌ってどうか・・・

風子 やりましようよ。

学 それは、その、君が浮気をしているとか、そういうこと？

風子 浮気？残念ながら一度もない。安心して。

学 じゃあ、好きになったことはあるの？僕以外の、誰かを。

風子 ちよつと待ってよ。また取り調べみたいになってる。今は私の番なん

だから・・・学さんは、聞く番。

学・・・

風子 ね？いいでしょ。

学・・・

学、何も言わない。

風子 (ろうそくの火をみつめながら、しばらくして) えつとですね・・・

学さんと最初に会ったときの印象は・・・最悪でした。以上。

学 なぜ？

風子 理由を聞くのは反則。

学 なぜ？

風子 だから、なぜ？っていう質問は、だめ。

学 何だよ・・・

風子 です。

学 最初に会ったのは・・・大学の頃か。

風子 そうよ、もちろん。

学 そんなに悪かった？印象。

風子 ええ、とても。長い髪に赤のペイズリーのバンドナ、西部警察に出てくる渡哲也のようなサングラス・・・ヘリコプターからショットガンで打たれるかと思いました。

学 ふうん。

風子 ご自身はなぜあのようなスタイルを？
学 なぜって、理由は訊かない約束だろう。
風子 イカす、とか思ってたの？
学 時代だろ、時代。あの当時は、だいたいみんな同じような恰好だった。
風子 いいえ。かなり、特殊な方だったと思うけど。
学 どうしてそんな僕と付き合うことになったの。
風子 今、何ておっしゃいました？
学 あ、理由は訊いちゃダメか。
風子 覚えてないの？
学 なに。
風子 なぜ付き合うようになったか。
学 ……どうだったかな。
風子 もう……ショックだわーかなり。
学 もうずいぶん前のことだし
風子 そうだけども……付き合いだしきつかけくらいは、覚えてるもので
学 しょう、普通。
風子 そうか？
学 そうよ。
風子 世間一般の夫婦はどうなんだろうな。
学 世間一般のことは存じ上げませんが、少なくとも私は覚えてますけど。
風子 ど。よおく。
学 怖いな、その言い方…。
風子 そうですか。
学 うん。なんか、怖い。
風子 じゃあ、次、学さん、どうぞ。
学 僕？
風子 ええ、お願いします。
学 ええっと、何だっけ。
風子 秘密です、秘密。私に内緒にしていることを、打ち明けてください。このろうそくの火のもとで。
学 秘密？秘密ね。
風子 あるでしょう。浮気したとか、風俗行ったとか、愛人がいるとか、麻薬に手を染めているとか、借金があるとか…。
学 君の亭主は、どんな人間なんだよ…。
風子 ……どうぞ。
学 そうだなあ……秘密ね……秘密……。う~~~~ん。

風子 出會つて、35年くらいたつんだから、いくらでもあるでしょう。何でもいいのよ。何か、私に隠していること、あるでしょう。
学 いきなり言われてもなあ……そうだなあ……秘密ね……秘密……うーん。

学、考え込んでしまいうちに、時は過ぎていく……

学 思いつかないよ。

風子 え？

学 パス。

風子 何でもいいのよ。なんでも。

学 それが、思いつかないんだ。僕には。

風子 へえー。

学 だから、パス。

風子 そう。

学 ……

風子 じゃ、連続して私でいいの？

学 どうぞ。

風子 今度は、ちょっと大きめの秘密っていうか、これまで黙ってたことな
んですけど……私ね……もう一人、子どもが欲しかった、です。
はい……

学 そう。

風子 そうなんです。

学 えっと、何て言っているか、わからないけど。

風子 いいの、それは。別に何か学さんに何か言つて欲しいわけじゃないか
ら。

学 何なの？これ。もうやめようよ。

風子 どうして？

学 意味ないよ。こんなこと。

風子 そうかな？

学 何がしたいの？君は。

風子 小説を読んだから。

学 その小説がなんなの？

風子 同じことをやってみたくて。

学 わからないよ。僕には。君がどうしたいのか。

風子 そう？

学 理解できない。
風子 ふうん。

しばらく無言の時間が流れるが、唐突に

風子 どうなってたかな。

学 ……。

風子 子育て、大変だっただろうな。百合子ひとりでも大変だったのに、もう一人いたらどうなってただろう……。学さんは非番の日でも、突然呼び出されることも多かったし、家族で旅行にも行けなかったし、転勤も多かったし、だからずっと官舎暮らしだったし……。

学 それは、僕のせいで、子供を諦めたってことを言いたいのか？

風子 そうじゃないよ。

学 いいや、君の言っていることはそうだ。僕の仕事のせいで、君は、僕たちの人生を、妥協しなくちゃならなかったと、そう言っているんだ。

風子 そうじゃないってば。

学 じゃあ、なぜ、言わなかったんだ。まだ君が、子どもを産めるカラダ

だったところに。

風子 そういう言い方はやめて欲しい。とても傷つく。

学 ねえ。だから、やめよう。こんなこと。お互いが損なわれるだけだ。

学、ろうそくの火を消す。

風子、その様子を見ている。

学 何もいいことはないだろう。

風子 そうかな。

学 ねえ、どうしたの？何だか、今日の君はおかしいよ。

風子 ……どうかな、新幹線。動いたかな……。あ、電話してみましょうか。百合子に。それがいいわね。

風子、電話をする。学、スマホを取り出す。

風子 だめだ。通じない。どうしたんだろ。やっぱり携帯の電波、届かないところに停まってるのかな、新幹線。

学 (スマホの操作をする) あ、これ、そうかな……

風子 なに？

学 電気はついてるみたいだ。
風子 ツ、ツ、ツイッター？
学 空調も、大丈夫だって。なんか。
風子 ああ、よかった。
学 うん。
風子 すごいね、ツイッター。
学 こういうとき、やっぱり、役立つね。SNSってやつは。
風子 本当ねえ。
学 よかった、とりあえず。

学、じつとどこかを見つめている。

学 前に、署長に貰った、あるでしょ。ブランデー。飲みかけの。あれ持ってきてよ。ゴルフのコンペでもらったけど、俺は飲まないからって
風子 いただいたやつ。
学 だけど、運転があるでしょう。
風子 任せるよ。
学 任せるって……。
風子 持ってきて。
風子 わかりました。

風子、ブランデーを取りに行く。
学 (スマホを見る)
風子、ブランデーと、コップを持ってくる。

風子 はい。
学 なにこれ？
風子 だめ？
学 だって、ブランデーだよ。
風子 飲まないから、わからないんだよ。
学 いいか、ブランデーっているのはだな……。
風子 ……
学 ……わかったよ……自分で立つよ。

学、自分で取りに行く。
学、グラスを持って、戻ってきて、

学 これがブランデーグラスな。

風子 ふうん。

学 ブランデーっていうのは、ワインを蒸留して作った酒なんだよ。だから、こうして、グラスに注いだあと、手のひらで温めて、香りを楽しみつつわけ。わかる？

風子 わからない。

学 (グラスに口をつけて飲む)

風子 おいしいの？

学 これは高級過ぎて、うまいかどうか、いまいち、わからない。

風子 なによ、それ。

学 タバコもうまいけど、君に言われてやめたからね。

風子 やめてよかったでしょ。お金もずいぶん節約になるし。

学 感謝してるよ。まあ、余命半年とか言われたら、また吸うけど。

風子 どうぞ、ご勝手に。

学 君が飲めたら、また違ったかもしれないなあ。僕たちの人生。

風子 どういうふうに？

学 ん？ほら、晩酌しながら、こう・・・いろいろな話をしたり、

風子 晩酌しなくなっちゃって、できるでしょ、話は。

学 どこかの雪国に旅して、知らない居酒屋で泥酔してさ、凍えながら雪道を肩組んで歩いたり・・・途中、滑って転んだりして・・・歌でも歌いながら・・・ホテルまで歩くんだ。

風子 飲んでなくてもできるでしょ。

学 ダメだよ。二人とも、泥酔しなくちゃいけないんだよ。だからいいんだよ。

風子 なにそれ、意味がわからない。

学 だろうな。

学、ブランデーをもう一杯グラスに注ぎ、一気に飲む。

風子 ちょっと、そんな風にして飲むお酒じゃないんじゃない？

学 まあ。

風子 そんなに強いつて方じゃないんだからね。

学 ありがとう。

風子 もう・・・でも、一緒に車には乗ってくださいよ。お父さんがいるのに、迎えに来なかったりしたら、百合子、変に思うでしょう。

学 変って。

風子 だって、学さん、家にいるときは、どんなに疲れていたって、百合子の送り迎えだけは、やってくれたじゃない。

学 そうだっけ？

風子 そうよ。

学 あまり覚えていないけど。

風子 だからね、せめて助手席に乗ってくださいよ。

学 適当に言えばいいだろう。待ちくたびれて、お酒飲んで寝ちゃったとかさ。

風子 一緒に飲んであげたらいいじゃない。百合子のお相手と。ほら、なん

かのCMであったじゃない？

学 あれは、ウイスキー。これはブランデー。

風子 何でもいいのよ。お酒は。カランコロンって。

学 ブランデーには氷は入れないの。

風子 とにかく、よろしくね。

学 どこ泊まるの。

風子 誰？

学 誰って、百合子たち。

風子 ここだけど。

学 ここ？

風子 ええ。これ（ソファ）どかせば、なんとかなるでしょう。

学 え？この古くて、汚くて、狭い官舎の我が家に泊まるの？

風子 ダメ？

学 いくらなんでも、アレだろ。え？百合子が言ったの？

風子 そうよ。なんか、この辺のホテル、みんな満室だったんだって。

学 そんなことないだろう。

風子 本当。

学 こんな田舎のホテルが満室って、ありえない。

風子 だって、今日はクリスマスイブだし。

学 ああ。

風子 しかも金曜日だし。

学 だけどさあ、え？本当に？

風子 それに、最近、中国の人も多いそうよ。いま、富士山が大人気だって。

学 ふうん。

風子 いいじゃない、何だか、キャンプみたいで。どうせ、夜遅いんだし。

一晩くらい、何とかなるわよ。

学　　すごいなあ、クリスマス。富士山すごいなあ。

学、ブランデーを注ぎ、また一気に飲む。

風子　ちよっと・・・。

学　・・・突然、在日とか言われて、つい、動揺したんだよ。ほら、あるだろう。自分の思ってもいないことを、・・・言うつもりもないのに、なぜか口をつけて出てしまうってことが、あるだろう？生きているうちに何度かは、あるだろう。

風子、どこかに行ってしまう。

学、ろうそくに火をつける。

学　秘密ね・・・秘密・・・何か、あるだろうか、秘密が。夫婦の間に隠し事はありません、という、おとぎ話のようなことを言いたいわけじゃあなくって、わざわざ相手に語り掛けるようなことが思い浮かばないんだ・・・出会って35年、結婚して30年・・・まがりなりにも、夫婦をやってきたつもりだけど、何もない。子育てもまかせつきりで、一人娘は気が付くと成長し、いつの間にか家を出て、そして今度は結婚相手連れてくるという・・・僕だけがここにおいて、周りがものすごいスピードで動いているんじゃないかと錯覚するが、これは実際にこの世界で起こっている間違いようのない、現実だ。

在日韓国人が、国語の教師だって？国語っていうのは、日本語を教えるんだろう？なぜ外国人に、自分たちの母国語を教わらなければならぬ？何かの冗談か？これは。こういうと、必ず言われることがある。日本で生まれて、日本で育ったから、日本人と変わらないじゃないか。何をそんなにこだわるのかと。人種差別じゃないかと。本当にそうだろうか？では彼らは、なぜ日本に帰化しない？在日韓国人の帰化条件は、きわめて簡単なはずだ。日本で生まれ育ったのなら、帰化すればいいだけの話じゃないのか。国籍など関係ない、平等に権利があると主張する側だって、自らの国籍を、手放せないでいるじゃないか。日本国民ではない以上、公的なサービスを受ける資格なんて本来ないはずだ。それなのに、日本国は在日に生活保護だって認めている。在日韓国人19万世帯のうち、じつに14%、2万世帯以上に生活保護を支給しているなんて、普通の日本人は知らないだろう。さらに選挙権をもたないことに不満を述べるというなら、帰化すればいい。日本人

になればいい。それだけの権利を私たち日本人は彼らに与えている。扉は開かれていますじゃないか。人権？多文化共生？寛容？たしかに美しい言葉だ。でも実際には、外国人による犯罪、在日韓国人による犯罪は増えている。僕は警察官として、地域住民の命と安全を、ときに自らの命をかけて守ってきたつもりだ。彼らによる犯罪が起こる度に、この国から出ていけばいいと思っていた。この国のナニカが壊れそうになっている感じがして、でも必死に守ってきたつもりなのに、僕が在と家族になるかもしれない？どんな顔でいればいいんだろう。ようこそ来ましたね、お仕事はいかがですか、狭い我が家ですがどうぞごゆっくり、と、ひきつった笑顔を作ればいいのか。そうやってやり過ごせばいいのか。それとも僕には娘の結婚に口を出す権利などないのか・・・百合子が修学旅行で沖縄に行ったことも、中学のとき、部活は何部だったのか、それすら知らなかったんだから・・・だから結婚反対だなんて、そんなことを言うつもりはない。娘が結婚したいと思っている若者を絶望させようとは思わない。それは、僕が娘を愛しているから・・・

学、そのうちに眠ってしまおう。

雨である。

どこからともなく、風子、やってくる。

学にとっと毛布を掛けてやる。

風子、ろうそくの火を見て、

風子

まさか、警察官の妻になるなんて、思ってもみなかった。本当は地元
の大学に行くつもりだったけど、たまたま担任の先生に、一度くらい
都会で生活するのも悪くないぞって言われて、その気になって、そこ
であなたと出会って結婚した。もし私の両親が反対したり、経済的に
無理だったり、あの先生の一言がなかったら、まったく違う人
生だったろう。百合子だって、この世にいなかっただろうし。私たち
は今ここにある人生より、あったかもしれない人生について考えるこ
とがある。違った生き方を、小説や映画に求めることがある。だけど
同時に私たちは知っている。人生は一度きりだと。百合子を産んで、
仕事をやめて、百合子が家を出たあと、なんとなくそのまま家にい
た。けどある日、もう一度、保育の仕事をしてみたいなって思って、
最近、近くの保育園で働き始めた。若いスタッフに囲まれて、朝から
夕方まで、子どもと遊ぶ。疲れるけど元気になれる。お給料は安いけ
ど……。だけど仕事をして、お金をもらうようになって、私、猛烈
に学さんと別れたいって思うようになった。お金をもらうって、こう
いうことだと思って。金額の問題じゃなくて、お金をもらうってこ
とは、こういうことだと思って。別に学さんのことを嫌になつた
わけじゃない。とてもいい人だと思う。ただ、一度きりの人生、折り
返し地点を過ぎた、残りの人生、私自身で変えてみたくなったのね。
村上さんちの奥さんじゃなくて、村上風子としての人生を送りたいと
思ったの。どうだろう。ただのわがままなのかな、これって。私の友
達は、きつと「それは素敵ね」って言ってくれる気がする。私はこれ
から、どこかに小さなアパートを借りて、だけど、猫を飼ってみたい
から、ペットも飼えるアパートを借りるんだ……。だって学さん、
猫アレルギーなんですもの。ずっと飼って見たかったの。猫。できれ
ば、黒猫がいいな。幼いころ、私の家にはずっと黒猫がいたから。そ
うやって私は……

突然、学、飛び起きる。

学

(汗をかいている)

風子 (驚いて) 大丈夫!?

学 ああ・・・

風子 夢でも見た?

学 ああ、うん。

風子 お水、飲む?

学 悪いね。

風子、水を取りに行く。

学、ろうそくの火を見て、つけっぱなしだったと思い、消す。

風子、戻ってきて、水を学に渡す。

風子 はい、お水。

学 (水を一気に飲み)

風子 もう一杯飲む?

学 いま、何時?

風子 もう少しで11時になる。

学 そうか・・・もう朝かと思った。

風子 怖い夢、見たのね。

学 いつものことだよ。

風子 ・・・

学 仕方ない。同業者は多かれ少なかれ、みんな同じように夢を見るらしいから・・・。(風子、グラスをしまう) 百合子、連絡は?

風子 まだ。

学 そう・・・あれ?雨?もしかして。

風子 そうなの。さっき、降り始めて。

学 そんな予報、出たっけ?

風子 夜中に降るかもって、そういえば。

学 そう。

風子 (風子、戻る) アメハ ヨフケ スギニ ユキヘト カワルダロ・・・
変らないか。ここじゃ。

学 よく降るもんな、君の故郷は。

風子 ええ。すごく降るのよ。雪は。

学 (毛布に気づき) これ、ありがとうな。

風子 風邪ひくと大変なもの。

学 君がね。

風子 ……まあ。

学 なにか喋っていなかった？ここで。さつき。

風子 私？

学 うん。

風子 別に、何も。

学 そうか。こうやって夢から覚めると、恐怖に襲われるときがあるんだよ。

風子 恐怖？

学 ああ。そうだ。もう取り返しのつかない世界に僕はいるんじゃないかっていう、恐怖だ。

風子 取り返しのつかない世界か。

学 ああ。

風子 それは、どんな世界なのかな。

学 百合子が小さいころね……「パパ」って呼ぶ声が聞こえると、つい反応してしまうことがよくあった。百合子がいるわけなのに、ついわかる。子どもの声が、みんな百合子の声に聞こえるのよね。

風子 怖かった……子供って、いつ死んでしまってもおかしくないんだなあって思うと、怖くてたまらなかった。「パパ」ってきこえる度に、あの子がどこかで僕に助けを求めているんじゃないかって想像してしまっ……子供が生まれるっていうのは、こういうことかと思っただよ。愛する存在を、ある日突然失ってしまうかもしれない世界に、僕はいるんだなって。百合子が、どんな娘になるのかっていう希望より、いつか失ってしまうかもしれないっていう恐怖が、常に僕を縛り付けていた。夢を見るようになったのも、それからだよ。百合子が産まれてから。

風子 でもよかったじゃない。百合子は今も生きているんだし。よかったじゃない。

学 そうだな。本当によかったよ。

風子 長いようで、短かったね。私たちの結婚生活。あつという間だった。学 あつという間「だった」って……どういうこと？

雨の音ひときわ強くなる。

風子、窓の方を見る。

風子 結構、降ってきたな……。大丈夫かな。百合子たち……。

学 本当にここでもいいの？

風子 仕方ないわよ。ここしかないんだから。

学 まあ・・・そうだけど。でも、あんまりじゃないか？
風子 大丈夫よ。

学と風子、ソファアに座って、

風子 ほら！キャンプ、キャンプ！！

学 ・・・・キャンプみたいだな。

風子 そう、家庭内キャンプよ。（あ、雨！）

学 まあ、いいか。これは、これで。

風子 そうよ。これはこれで、いいのよ。たまには。

学 家庭内キャンプでいいのか。そう思うと、気が楽だ。

風子 気楽に考えればいいのよ。雨だっていつか止んで、そして朝が来る。

学 そのうちに新幹線も動き出して、百合子がここに来る。彼氏を連れてやってくる。僕は「大変だったね、よく来たね」と言って二人を迎える。今夜は遅いから、もう休んでくれという。僕は黙って寝室へ。

風子 君は、風呂はどこにあって、タオルはあそこで、どうぞごゆっくり、それではおやすみなさい、また明日、といって、電気を消すのか。

風子 完璧なシュミレーション！

学 だろ？

風子 ええ、とても。

しばし、間。

学 それであの、秘密をひとつ思い出したんだけど、いいかな。

風子 秘密？

学 うん。秘密。

風子 なに、どうしたの？

学 だって、君から・・・。

風子 秘密？

学 そう。お互いに相手に秘密にしていること。僕の第一印象が最悪だったとか・・・。

風子 何で知ってるの？

学 もう一人、子どもが欲しかったとか・・・。

風子 え？

学 それで、いいかな、今度は僕から。あの、・・・仕事、辞めることにした。

風子 え？

学 たまった有給も消化することにした。だから明日からは、どこへも行かない。

風子 ……

学 以上……

風子、何も言わない。

学 どうしたの？怒ってるの。

風子 いいえ。

学 まあ、なんとかなるでしょう。夫婦、ふたりだけだし。ああ、ここも出なくちゃいけないな……取り急ぎ、不動産屋だな……あ、ほら、何か知り合いにいなかったっけ？不動産屋……

風子 ……

学 やっぱり、相談した方がよかった？だけど、君、ずっと反対だったろ？こんな生活、もう辞めたらって？なんで命を懸けてまで、他の誰かを守るのって？

風子 ええそう。もう二度と、あんな事件には、かかわってほしくない。だろ？最近、ますます夜が怖くなってきてね……寝ていても、ちつとも休まらなくて……この間、上司に相談してね……退職金も満額とはいかないけど、そこそこ出るようだし、思い切って、辞めることにしたよ。しばらくはまあ、のんびりとね。どうだ。温泉でも……

風子 ……

学 ゆっくり風呂にでも使って、うまいもん食ってさ。これまで、旅行らしい旅行、できなかったから。

風子 そうね……

学 (スマホを見て) とりあえず、別府あたりかな……

風子 だけど、私は仕事があるから。

学 休めるだろ？仕事なんて。

風子 そんなには、休めないよ。

学 いつも言ってただろ。たまには休んで温泉でも行きましようよってさ。そうね。

学 何だ、嬉しくないのか。

風子 仕事、まだ始めたばかりだから。あまりわがまま言えないし。

学 いざとなれば、辞めたっていいわけだし。

風子 辞めないわよ、私。

学 保育園のスタッフなんて、若くて元気な方がいいに決まってるじゃないか。君みたいなおばさんじゃなくて、その方が、保育園にとっても、いいだろう。

風子 なぜ、そんなことを言うの？

学 違う？

風子 そうかもしれないけど、そんなこと、言わないでよ。なぜ一番近くに
いる人から、そんな風に言われなくちゃならないの？

学 だって、僕は仕事を辞めたんだよ。だから、行こうよ、温泉に。温泉
じゃなくてもいい。海外だっていいぞ。ほら、フィンランドに行きた
いって、いつか言ってたよな。

風子 ありがとう。だけど、今は、仕事をまずは、がんばりたいんだ。

学 仕事なんて、いいだろ。

風子 よくない！

学 じゃあ、どうすればいい？明日から僕は、どうすればいい？もう仕事
辞めるって宣言してきちゃったんだよ？

風子 いいじゃない。時間はあるんだから、ゆっくり考えれば。

学 ……

風子 とにかく、お疲れ様。これでよかったのよ、これで。ありがとうね。

携帯が鳴る。風子、出る。

風子 もしもし？百合子？ああ、そう。……わかった。11時25分ね。

大丈夫よ、こっちは。迎えに行くからね。あ、食事はいいのね？本当
に。そうね……寝るばかりになるかもね。でも、明日も、お父さん、
家にいるっていうから……詳しくはまた……そうね……そうし
ましよう。わかったわ……じゃあね……気を付けてね。

電話の間に、学、ろうそくに火をつける。

学 あのさ、

風子 はい。

学 小説なんだけども、昔、君が読んだっていう。

風子 ええ。

学 それで、結局、ふたりはどんな秘密を打ち明けるの？

風子 ……二人は、関係がうまくいってないんだけど……奥さんが最後
の停電の夜に、夫に別れ話を切り出すの。もう新しいアパートも借り

たつて、打ち明けるの。夫はそれを黙って聞くの。そして夫は、奥さんに、最後の秘密を打ち明けて小説は終わるのよ。

学 最後の秘密。

風子 そう、こうして、ろうそくの火をはさんで……。

学 僕たちは、言い争うこともなかったし、特別な問題もなかった……違うか？

風子 お互いの存在を感じながら生きよう。きっと。すぐに慣れるよ。

学 まだ、想像できないけど、そんな生活。

風子、立ち上がる。

学、ろうそくの火を消す。

風子 それで、小説の話なんだけどね、

学 もういいよ。

風子 え？

学 もういいんだ。結末は、自分で読むことにするよ。小説のタイトルを教えて。

風子 ベッドのところに置いてあるから。

学 わかった。読んでみるよ。

風子 じゃあ、迎えにいきましょう。あなたが一緒じゃないと、百合子が悲しむから。

学 僕は……僕はその、小説を読むから。

風子 今じゃなくていいでしょ。

学 ごめん。今、読みたいんだよ。だから、その、君ひとりで行ってこないか。

風子 ……どうしても？

学 ごめんな。それはその、なんとというか、僕の中に残った、かすかに残った、熱、みたいなものなんだ。

風子 熱……？

学 ああ。

風子 わかりました。いいわよ。私、行ってくるから、ひとりですまない。

風子 大丈夫。お酒飲んで、待ちくたびれて、寝ちゃったってことにするから。

学 待ちくたびれたのさ、僕は。

風子 私も待ちくたびれたのかな……本当に行かない？

学 雨、ひどいな。

風子 ええ。

学 気を付けろよ。事故にあわないように。

風子 わかりました。安全運転でまいります。

学 バイパス、トラック、飛ばしてるから。

風子 はいはい。

学 今度、交通課の若いのに言っておくよ。取り締まり、強化しろって。

風子 じゃあ・・・行ってきました。

風子、行きかけるが、

学 風子！

風子 ん？

学 僕はその・・・小説を読みたいだけなんだ。本当に、それだけなんだ。

風子 わかってる。

学 ただ、それだけなんだ。

風子 わかってるって。

風子、行ってしまう。

学 こうして僕は、結局、秘密を打ち明けることができなのまま、風子は風のようにいなくなってしまった。僕は今も君の声を、風の中に聞こうとするけど、あの夜の雨音に、かき消されてしまう。どこにいるんだ、風子。小説の中の秘密なんて、どうでもよかったのに、僕は僕の中の熱にうなされて、君を見失ってしまった。いまにも消えてしまいうような、かすかな熱の存在を、在日という言葉聞いたときのカラダの振動を、消し去ることができなかった。失ってわかる、ひかりのおもさよ、明るさよ。もっと早く、それに気づくことができたなら、わかりあえたはずなのに。こうして離れ離れになる前に、語り合えたはずなのに。もう傷つけあうこともなく、今は別々の場所に散ってしまった。僕は・・・僕は・・・。